

## Q 1 嬉野小学校は、どんな研究をしているのですか？

### A 1 これまでの研究の歩み

#### 第1期 「評価」の研究（H12～）

文科省の指定を受け、国語科と図工科を中心に、指導目標を設定し、単元レベル・授業レベルで目標設定をすることで、学習者につける学力を意識した研究に取り組みました。今でも、何の力を育てているのかという指導者の意識として、毎年作成する各教科年間指導計画の中にも受け継がれています。

#### 第2期「読むこと」領域の研究（H14～）

読解力を確実に身につけさせることを主眼とした研究。活動目的・相手意識を学習者に持たせることで意欲の継続を図りました。紙芝居等の演劇的活動や音読等、楽しい学習活動に取り組みました。

#### 第3期「書くこと」領域の研究（H17～）

じっくりと考える場・表現の場としての「書く活動」に取り組みました。低・中学年は書き慣れが進み、高学年では、多様な表現の方法を愉しむ姿が見られるようになりました。今でも、日記指導に取り組む学級が多く、夏休みには楽しい作文ワークを集めた「作文の本」を各学年で作成し、子どもたちに配布しています。

#### 第4期「話すこと聞くこと」領域の研究（H19～）

県の指定で学力向上に関わる研究として、再スタートしました。これまで習得した読解力や表現力を発展させ、瞬時の理解力・表現力を習得させることを中心に据えた研究をスタートしました。スピーチ活動やグループによる話し合い活動が盛り上がりました。ビデオを活用した音声言語教材の作成や学級・学年でのTTによる指導方法の探求など成果が見られました。

#### 第5期「話すこと聞くこと」と「読むこと」を関連させる研究（H20～）

更に学力向上を意識した研究に深化させようと試みています。  
詳しい内容については、下記をご一読下さい。

### A 2 本年度「第5期『読むこと』に『話すこと聞くこと』を関連させる研究」について

#### ① 研究主題名

「伝え合う愉しさが実感できる『話すこと・聞くこと』『読むこと』の学習」  
～自分のことば・相手のことばのよさに気づかせる指導を通して～

#### ② 新学習指導要領に見る「関連」

新学習指導要領の基本的考え方は、基礎・基本となる知識・技能の習得を重視した上で、それを活用する学習活動を充実し、思考力判断力・表現力等を育成する、つまり活用力を求めています。本校の研究においても、「国語タイム」の取り組み等で音声言語の基礎力に培い、指導目標を設定した「話すこと聞くこと」単元作りの工夫を通して基本を押さえ、また、読解や作文の指導と関連させることを通して活用する学習を視野に入れた取り組みを展開中です。また、教育内容の主な改善事項には「言語活動の充実」があげられています。言語は、知的活動やコミュニケーション、感性・情緒の基盤であるという考えから、基本的な力を定着させた上で、各教科等において説明、論述、討論といった学習活動を充実させること、つまり、学習全般の中で「話すこと・話し合うこと」

の力が有効に発揮されることが、ますます求められているのです。「話すこと・聞くこと」の学習で習得したことを「読むこと」に関連させる本校の研究は、国語科内で領域を関連させる学習の第1歩として意義があります。

### ③ 「伝え合う愉しさ」とは

対話を行うことにより、自分の伝えたい思いを、教師や友達等が受け止めてくれた時に味わう安心感・満足感・成就感です。対話とは、聞く状態と話す状態が交互に訪れる状態です。1対1のペア対話はもちろん、3人で行う鼎談、4人以上のグループ、学級全体での話し合いも大きく対話と捉えています。

対話が成立する基盤として、話が聞いてもらえるような温かい学級の雰囲気が大切です。話し手に恥をかかせないような学級経営を目指します。

「聞き手」には、相手の話を聞き取る基礎的な力、聴解力を習得させなければ成立しません。週行事に国語タイムを設定し、全校的に聞く基礎体力を高められるようカリキュラムに位置づけます。

「話し手」には学年段階や個の実態に応じた「話型」を習得させていく必要があります。

「話型」とは、対話活動を支える具体的なことばで、対話の中で駆使される技能を指しています。低学年では「反復」をキーワードに、復唱確認・挨拶・感想・話題・同意等の話型を使用しながら、自由な場で繰り返し話す、実物を持って話すことで対話に熱中する姿を想定しています。中学年では、「質問」がキーワードです。勧誘・相違・類似・転換等の話型を使って、身近な話題で話す、説明・報告を基に話し合うことで対話に熱中させる姿を想定しています。高学年では、「関連」がキーワードです。発展・比較・換言・予想といった話型を使って、生活を向上させる話題で話す、資料の効果的な提示で話す、観点を持って聞くことで熱中する姿を想定しています。

活動的な単元を仕組むことで、以上のような対話状態を実現させます。そうすることで、児童の個々の言語生活の質を、自然習得的なものから、のびのびとした「楽しさ」、正確性・豊かさの増した「愉しさ」へと高めていくことが「伝え合う愉しさ」を実感させることになると考え、本テーマを設定しました。

### ④ 「自分のことば・相手のことばのよさに気づかせる」とは

「自分のことばのよさに気づく」とは、対話を行うことにより、自分の伝えたい思いがはっきりと持てることです。「読むこと」の学習になぜ全ての児童が熱中できないのか、積極的に参加できないのかという反省をしました。相手意識・目的意識を持った活動を取り入れた単元作り等、工夫してきましたが、一人一人の考えを話す機会を十分に保証しているとは言えませんでした。「私が考えなくても授業は進む」という面は確かにあったかもしれませんが。大村はま氏が「隣の人は宝物」とおっしゃったように、ペア対話等を取り入れ、仲間と話す機会を保証されることによって、いつも自分の考えを持つ習慣をつけることから始めたいと思います。

「相手のことばのよさに気づく」とは、相手の意見を認める力です。「〇〇さんは、よく言えたね。」という励ましから始まり、よく分かった、分かりやすかった、工夫していた、どのことばが良かった、〇〇さんらしかったという賞賛へと深化していくことを想定しています。内容的な良さと形式的な良さがあります。自分の意見が認められることで、仲間の意見も認めることができるようになるので、今年度はその出発点として、教師が大いに賞賛し意欲を高めるとともに、形式的な良さの価値付けをしていきたいと考えています。